

## 入選

### わたしの受けた「小さな親切」

福井県 松陵中学校

二年 浜上 恭羽

この夏、一年遅れの東京オリンピックが開催された。コロナ禍ということもあり、出場を決めていた選手たちも、その当日まで競技が本当に開催されるのか、心配していたことだろう。私も、テレビを通じてではあるが、そんな選手たちを応援しようと連日画面に向かって声援を送っていた。

選手たちはすばらしい活躍をし、どの競技でもたくさんのメダルが獲得された。例年の大会よりも、さらに一年長く必死に練習を続けてきた選手たちにとって、そのメダルはなにものにもかえがたい努力の証であったに違いない。

そんな喜びいっぱい選手たちが、インタビューを受ける中で、必ずとっていいほど口にしていた言葉が、私の心に強く響いた。

「感謝」。もしかしたら今年も、オリンピックは開催できなかつたかもしれない。それでもこうして、メダルを手にして喜ぶことができるのは、見えないところで支えてくれた家族やチームの仲間、大会関係者、そしてボランティアのみなさんのおかげであると、誰もが口をそろえて話していたのだ。

選手たちの笑顔と涙の場面を見ながら、私は私自身のこの夏のある場面を思い返していた。

私は吹奏楽部に入っている。入部してもう一年半になろうとしているが、コロナのこともあり、去年は多くのコンクールや発表の場が中止になった。

しかし、今年になって初めて、コンクールが開催されることになった。練習はとても大変だったし、なにより私にとっては、大きな舞台で演奏する初めての機会だったので、とても緊張していた。舞台裏で、自分たちの演奏を待っている間は、特にそうだった。

そんなとき、大会を運営してくれていた高校生スタッフの動きや声かけのおかげで、どこかほっとしている自分に気づくことができた。その高校生スタッフたちは、重い楽器をいっしょに運んでくれたり、的確な指示で私たちを誘導してくれた。

演奏が終了したときも、

「お疲れ様でした。」

と笑顔で応対してくれたのだった。まさに、オリンピックで選手たちを支えるスタッフやボランティアの人たちと同じように、私たちの緊張をやわらげてくれた大切な存在であったと私には思えた。

スポットライトのもとで輝く人たちは、たくさんいる。しかし、その人たちを輝かせるために、さらに多くの人たちが、スポットライトの当たっていないところで必死に支えてくれていることを、私はこの夏自分自身の経験からたくさん学んだ。

今度は、私自身が誰かのために力をつくせる人になりたい。周りの人への感謝の気持ちを忘れず、誰かのために少しでも手を貸すことのできる中学生でありたい。